

平成 22 年度 大学図書館職員短期研修（京都大学会場）

平成 22 年 10 月 5 日（火）9 時 45 分～10 時 45 分

大学経営から見た大学図書館

立命館大学図書館長

吉田美喜夫

1. はじめに

(1) 自己紹介

(2) 対象の限定

- ・この後、「大学図書館の現状と課題」というテーマの講演が予定されている。
- ・本テーマの意味：「経営者の立場から見た」
「経営体として見た」

2. 大学の環境変化

(1) 大学のユニバーサル化

- ・エリート：進学率 15%未満
- ・マス：15%以上 50%未満
- ・ユニバーサル：50%以上
「非選抜型大学」の増大

(2) 私学化

- ・「営利大学」
ただし、株式会社立大学の破綻
- ・民間委託・アウトソーシング
- ・国立大学法人化（2004 年度から）
ただし、経常経費の 1%カット
04 年から 08 年までで一橋大学 6 校分削減
- ・背景としての規制緩和
設置認可制度の緩和→学部・学科の改組の容易化→教育ニーズへの対応を巡る競争の激化
近年の教学分野は、規模のメリットが得にくい分野

(3) 大学の「デパート化」—市場規模の縮小

- ・18 歳人口の減少
ピーク時（205 万人：1992 年）の 40%減
120 万人台が今後 10 年続き、その後、さらに減少
- ・今後の少子化
合計特殊出生率 1990 年の 1.57 ショック→2009 年：1.37、100 年後は人口が 3 分の 1 に
- ・ワーキング・プアー問題

家計の貧困化、将来の進学率に影響

(4) 受験動向の変化

- ・ 2008 年度入試：規模上位 1 割に 7 割の志願者
難関大学
ブランド大学
首都圏の大学

(5) 定員割れ

- ・ 2009 年度：265 校＝46.5%
- ・ 入学者確保の困難性
- ・ 退学者の増加
大学教育とのミスマッチ
経済的事情
- ・ 大学の学生募集停止
平成 22 年度からの例
三重中京大学（三重県松阪市）
聖トマス大学（兵庫県尼崎市）
神戸ファッション造形大学（同県明石市）

(6) 財政の縮減

- ・ 元々、高等教育に対する公財政支出は低水準
2007 年：GDP の 0.5%：OECD 平均 1.1%
- ・ 運営費交付金のカット
87 国立大学法人に 1 兆 2,000 億円支出→1%カット
- ・ 私学助成のカット
大学の経常費の 11%程度助成：3,200 億円
競争的資金配分の割合が増加
- ・ 自治体の財政難（公立大学の危機）

(7) 破綻後の対応の検討

- ・ たとえば、学籍簿の管理（日本私立学校振興・共済事業団「私立学校の経営革新と経営困難への対応」〔2007 年 8 月 1 日〕）

3. 大学経営の戦略と戦術

- (1) 大学による経営の自己責任論
 - ・国立大学では、経営責任を明確化し、それに基づき戦略的な大学運営の実現→自己責任を負うということ
 - ・私学では、元々、自己責任

- (2) 学生の確保
 - ・進学率の上昇 (?)
 - ・対象の拡大
 - 社会人教育
 - 卒業生の再教育 (再入学)
 - 同窓会組織の重要性
 - 学生の父母のネットワークを通じた志願者確保
 - 父母教育後援会の組織化
 - 留学生
 - 学内の国際化 (英語による授業など)
 - 在学生の国際化

- (3) 企業との関係の再考—学生の進路との関係で
 - ・終身 (長期) 雇用慣行と結合
 - 企業内で職業能力の養成 (ただし、当該企業に限定した能力)
 - ・終身 (長期) 雇用慣行の衰退
 - 正規従業員
 - 中核的正社員
 - 周辺的正社員
 - 非正規従業員
 - 生活自立型
 - 家計補助型
 - ・「就活」の意味
 - キャリア教育の重要性

- (4) 企業との関係再考—研究開発との関係で
 - ・中小企業の研究機能
 - ・知的財産の活用

- (5) 大学の役割の自覚

- ・学生の多様化
 - 入試方法の多様化
 - 私学では、約半数は通常入試以外の方法
- ・教育の質の改革が課題
- ・学生の満足度
- ・高校教育との落差
 - どう接続するか
- ・社会に出る直前の教育機関としての大学の使命
 - 多様な活躍を保証し知識社会を生き抜く基礎的な知力と専門能力の涵養
 - 強い基礎学力が真の多様性を保障する
- ・目標
 - 「教育の質保証」
 - 「学習者中心の教育」
 - 「研究に支えられた確かな教育」（研究センター大学化という意味ではない）
- ・「面倒見の良い大学」→大学経営の基本を「学生中心」に置かざるを得ない
 - これとの関係で、図書館の役割を考える
 - 大学教育の変革の課題と結合

4. 大学の将来と図書館の役割

(1) 図書館の現状と課題

- ・共通の指摘
 - 情報通信技術の発達
 - 電子ジャーナル、データベース、所蔵資料のデジタル化
 - 紙媒体の経費の圧迫
 - 学術雑誌などの高騰
 - 購入順位の設定の困難さ、財政の硬直化
 - 大学財政の厳しさ
 - 図書予算の位置づけ
 - 大学の教育・研究の在り方の変化
 - 国際化
 - 収蔵スペースの確保

(2) 研究と図書館

- ・図書予算の確保と適切な配分
- ・主題について、サブジェクト・ライブラリアンのサービス
- ・研究成果の発信

(3) キャンパスの中の図書館の位置

- ・ペギー葉山 “学生時代” の図書館
「秋の日」の「ノートとインクの匂い」→学習と静謐な環境
- ・学園のミッションの表現
- ・教育・研究・生活に寄与する舞台
- ・卒業後まで残るアイデンティティ

(4) 利用者に焦点を当てた展開の方向を考える

- ・大学における図書館はだれのものか？
「佐伯千尋文庫目録」に見る戦前の帝国大学図書館
教員が借り出して、長期間、研究室に保管
図書が教員「個人のもの」
個人研究室が書庫の役割
- ・図書館の“民主化”
学習者“主権”：学習支援体制の整備（サポートデスクなど）
ラーニング・コモンズ（LC）の歴史的意味
学生の参加
学生が図書館の運営に参画する（選書などへの貢献）
単に図書館の利用者としての声を聞くだけではない

(5) 教学面での図書館の役割

- ・厳しい経営環境の下で、図書館が核になれるのではないか
学部の壁、教職協働
- ・学生支援
- ・カリキュラム編成
- ・リザーブブック制度、シラバスの文献提供
- ・LCの施設をもつことが大学入学生の獲得に貢献
成蹊大学の入学者のコメント参照

(6) 大学における「空間」の重要性

- 「独特の空間」としての図書館
知の集積を眼前に展開する圧倒的な存在感（先人の努力に触れる）
知的作業を共同の空間で共有する（自宅のビデオと映画館での観賞の差）
- ・大学の中に滞留する、大学にいる時間が長くなれば、大学に愛着が湧く

長時間滞在できる備品（椅子や机）（快適な学習空間）

「原っぱとすみっこの理論」（八重樫教授）

複数のグループが同一空間で思い思いの時間を過ごす条件づくり

グループ学習の重要性（回生の上下も重要）→そのためのスペースの保障

自然と足が向く空間

アイデアが出る、話が盛り上がる空間づくり

教員・学生、学生同士のコミュニケーションの環境

5. おわりに

図書館の教育力の開発が問われている

(以上)